

は全く逆になっている事だが、この逆転は、話の骨格には影響がなく、もともと、交換可能な設定である。相違点の第二は、「名づけ親」という設定である。グリムでは、死神は、主人公の名づけ親である事が明記されているが、落語では、「名づけ親」と何か関係がある事が示唆されてはいるものの、明示されない事が多い。だが、これも、話の骨格には影響のない設定である。(名人)によれば、明治四年の「文芸倶楽部」第一七巻五号に掲載された金馬の口演速記は「名づけ親」という題になっているという。こう見ると、落語「死神」はグリムから作られたように思われるが、多くの落語の解説書の記述は、意外なものである。

多くの解説書では、落語「死神」が三遊亭円朝(初代 一八三八―一九〇〇)によって、イタリアのオペラ「クリスピノー」から作られたと書かれているのである。ただ、タイトルを間違えて、「クリピスノ」、特に「靴直しクリピスノ」と書かれているものが多い。(今村四)には「これは元イタリアのオペラ『靴直しクリピスノ』を翻案したもので円朝の作」とあり、この増補改訂版たる(東大)では「明治中期にイタリアのオペラ『靴直しクリピスノ』からヒントを得てつくったはなしで、円朝作といわれる」、(今村) (今村二)では

五六

「是は伊太利のピアアヴェ作の喜歌劇『靴屋と妖精』又は『靴直しクリスピノ』の脚色である」となっている。(永井) (永井二)には、「この話はイタリアの歌劇『靴直しクリピスノ』を円朝が翻案したものだ」とあり、(山口)には、「原話がイタリアの歌劇『靴直しクリピスノ』にあるそうだ」とある。(保田)では、「三遊亭円朝が、イタリアのオペラからヒントを得て作ったといわれる」とあり、(山本)には、「グリム童話に『死神の名づけ親』があり、それをもとにイタリアで『クリスピノと名づけ親』という軽喜歌劇が作られた。これらが福地桜痴などから三遊亭円朝に伝えられ『死神』の創作に結びついたものと思われる」とある。(相澤)でも、グリムの「死神の名づけ親」に関連して、「イタリアでは『死神』を脚色したオペラが人気を博していた(中略)円朝がオペラの話聞き、これを落語に仕立てたものらしい」とあり、(市川)もこれにしたがっている。(飯島)も、ほぼ同様であり、(落合)はこれにしたがっている。(富田)では、「ハイカラな感じがするのは、この落語のもとがイタリアのピアアヴェ作の喜歌劇『靴直しと妖精』だからだといわれている」とある。音楽書を調べると、(永竹)の、現在、流通している改定版には、オペラ「クリスピノー」に